

看護学生の社会人基礎力と日常生活体験の関連

草地由佳*¹ 仲田紀代美*¹

要旨：本研究は、看護学生の社会人基礎力と日常生活体験の関連性を明らかにし、看護学生を「自立して行動できる看護職」へと成長させるための、看護基礎教育のあり方への示唆を得ることを目的とした。岡山県A専門学校の保健看護学科1年生33名を対象に、属性（年齢、性別）、社会人基礎力、日常生活体験を調査した。分析は、独立変数を身近な人の介護・看病の頻度、部活・サークル・クラブチームへの所属期間、アルバイト期間、ボランティアの回数、新聞と読書の頻度、家族や友人と自分からコミュニケーションをとる頻度とし、従属変数を前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）の能力とした3つのモデルの重回帰分析を行った。結果、社会人基礎力の前に踏み出す力（アクション）とボランティア経験と介護、看病の経験は、有意な正の関連を示していた。また、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）とボランティア経験は、有意な正の関連を示していた。看護学生の社会人基礎力向上においては、多様な人々とのかかわりを増やすことが出来るように、全員が、教科外活動を積極的に取り入れていくように体制を整えていくことが課題である。

キーワード：看護学生、社会人基礎力、日常生活体験、ボランティア

はじめに

看護専門学校において、社会人育成のための人格教育や生活指導は、看護職を養成する上で重要な役割を担っている。そのような中、経済産業省は、職場や社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために必要な基礎的能力を「社会人基礎力」と定義¹⁾し、組織や社会の中で、自らのキャリアを切り開いていく上で必要な力として位置付けている。また、日本看護協会が行った「病院看護実態調査」によると、2022年の新卒看護職の離職率は10.3%と増加傾向となり2005年以降、初めて10%を超えた²⁾。日本看護系大学協議が2021年3月卒業生を対象とした実態調査では、病院看護師に限定しても就職後1年以内の退職率は2.8%と少ないが、退職理由は、業務不適合、人間関係、リアリティショック、看護職不適合などであった。業務不適合、リアリティショック、看護職不適合などに対し、キャリア支援の重要性が指摘されている。したがって、社会人基礎力は、キャリア教育の中に取り込むことが可能であると示唆されている³⁾ことから、看護基礎教育における社会人基礎力を向上させる取り組みが必要になってくる。看護学生を対象とした先行研究では、看護系大学生の1～4年生を対象とした社会人基礎力と日常生活体験との関係が関与しているとの報告があるが、看護専門学校での生活や授業、実習体験の少ない1年生を対象とした報告は見当たらない。そこで本研究は、入学直後の看護学生1年生を対象に、社会人基礎力と、日常生活体験の関連性を明らかにすることにより、看護基礎教育のあり方の示唆が得られると考

*1 玉野総合医療専門学校 保健看護学科

え調査を実施した。

研究方法

1. 調査対象

学生主体のボランティア委員を発足し、地域社会に貢献できる人材として育成することを目指し、カリキュラム外でボランティア活動を進めている岡山県 A 看護専門学校（以下、A 校）の保健看護学科 1 年生 35 名とした。

2. 調査期間

2023 年 9 月 1 日～30 日

3. 調査内容

調査内容は、属性（年齢、性別、世帯）、社会人基礎力、日常生活体験とした。

社会人基礎力は、前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力（アクション）、疑問を持ち、考え抜く力（シンキング）、多様な人々とともに目標に向けて協力する力（チームワーク）の 3 つの能力から成り立つ。測定尺度はこれらの 3 つの能力を構成する 12 能力要素（主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）の 36 項目とした（表 1）。36 項目については、数量的評価を目的とした本質問紙においては能力差をより鮮明に確認できるよう、「全くあてはまらない：1 点」から「非常にあてはまる：7 点」の 7 段階のリッカートスケールを用いた。なお、得点が高いほど、社会人基礎力が高いことを意味する。また、日常生活体験は、学生生活実態調査と私立大学学生白書⁴⁾を参考に、部活・サークル・クラブチームに所属は「経験なし」から「3 年以上継続」、アルバイト経験は「経験なし」から「1 年以上継続」、ボランティア経験は「なし」から「10 回以上」、身近な人の介護、看病経験は「全くない」から「何度もある」、家族や友人とのコミュニケーションは「全くとらない」から「積極的にとる」、新聞（テレビ欄を除く）や 1 か月に 1 冊以上の本を読む習慣（漫画、コミック、週刊誌、月刊誌を除く）は「全く読まない」から「毎日読む」の全て 4 件法で回答を求めた。

表 1. 社会人基礎力の構成要素⁵⁾

能力	能力要素	定義	発揮できた例（具体的な行動例）
前に踏み出す力（アクション）	主体性	物事に進んで取り組む力	<ul style="list-style-type: none"> 自分がやるべきことはなにかを見極め、自発的に取り組むことができる 自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自信をもって取り組むことができる 自分なりに判断し、他者に流されず行動できる
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	<ul style="list-style-type: none"> 相手を納得させるために、協力することの必然性（意義、理由、内容など）を伝えることができる 状況に応じて効果的に巻き込むための手段を活用することができる 周囲の人を動かして目標を達成するパワーを持って働きかけている
	実行力	目的を設定し確実に実行する力	<ul style="list-style-type: none"> 小さな成果に喜びを感じ、目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる 失敗を恐れずに、とにかくやってみようとする果敢さを持って、取り組むことができる 強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる
考え抜く力（シンキング）	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	<ul style="list-style-type: none"> 成果のイメージを明確にして、その実現のために現段階でなすべきことを的確に把握できる 現状を正しく認識するための情報収集や分析ができる 課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	<ul style="list-style-type: none"> 作業のプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てられる 常に計画と進捗（しんちよく）状況の違いに留意することができる 進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正できる
	創造力	新しい価値を生み出す力	<ul style="list-style-type: none"> 複数のもの（もの、考え方、技術など）を組み合わせ、新しいものをつくり出すことができる 従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策をつくり出すことができる 成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探している
チームで働く力（チームワーク）	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	<ul style="list-style-type: none"> 事例や客観的なデータなどを用いて、具体的にわかりやすく伝えることができる 聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる 話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えている
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	<ul style="list-style-type: none"> 内容の確認や質問などを行いながら、相手の意見を正確に理解することができる あいづちや共感などにより相手に話しやすい状況をつくることができる 相手の話を素直に聞くことができる
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見を持ちながら、他人のよい意見も共感をもって受け入れることができる 相手がなぜそのように考えるかを、相手の気持ちになって理解することができる 立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	<ul style="list-style-type: none"> 周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができる 自分にできること・他人ができることを的確に判断して行動することができる 周囲の人の状況（人間関係、忙しさなど）に配慮して、よい方向へ向かうよう行動することができる
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力	<ul style="list-style-type: none"> 相手に迷惑をかけないように、最低限守らなければならないルールや約束・マナーを理解している 相手に迷惑をかけたとき、適切な行動をとることができる 規律や礼儀が特に求められる場面では、粗相のないように正しくふるまうことができる
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対する力	<ul style="list-style-type: none"> ストレスの原因を見つけて、自力で、または他人の力を借りても取り除くことができる 他人に相談したり、別のことに取り組んだりする等により、ストレスを一時的に緩和できる ストレスを感じることは一過性、または当然のことと考え、重く受け止めすぎないようにしている

4. 分析方法

分析は、独立変数を身近な人の介護・看病の頻度、部活・サークル・クラブチームへの所属期間、アルバイト期間、ボランティアの回数、新聞と読書の頻度、家族や友人と自分からコミュニケーションをとる頻度とし（以下、6つの独立変数）、従属変数をアクション、シンキング、チームワークの能力とした3つのモデルの重回帰分析を実施した。統計処理ソフトはHAD15.0を使用した。有意水準は両側検定にて5%未満とした。

5. 倫理的配慮

調査対象には研究目的、内容、手順、利益、不利益、匿名性について、実施時には口頭で説明したうえでWeb調査（Google Forms）アンケートへの協力を求めた。また、研究に協力しない場合でも不利益が生じないこと、回収したデータは統計学的に処理し研究目的以外に使用しないこと、返信をもって研究参加の同意が得られたと判断する旨についても口頭で説明した。

なお、本研究は玉野総合医療専門学校の承認（研究計画番号：2023001）を得て実施した。

結果

1. 基本属性

A校に入学した1年生35名を対象に調査を実施した。その内回答がなかった2名を除いた33名から回答があり（回収率94%）、有効回答率は100%であった。回答者は男子学生4名、女子学生29名であった。

2. 分析結果

1) アクションと6つの独立変数の関連

アクションと身近な人の介護・看病の経験、ボランティアの経験とは統計学的に有意な正の関連が認められ（0.341, 0.453）、部活・サークル・クラブチームへの所属期間、アルバイト期間、新聞と読書の頻度、家族や友人と自分からコミュニケーションをとる頻度は統計学的に有意な関連は認められなかった（0.157, -0.135, 0.166, 0.209）。なお、本分析モデルにおける授業外学習時間に対する説明率は、36.0%であった（表2）。

表2. アクションと日常生活体験の関連

変数名	標準化係数	95%下限	95%上限
身近な人の介護、看病	.341 *	0.002	0.680
部活、サークル、クラブチームに所属	.157	-0.224	0.538
アルバイト経験	-.135	-0.483	0.213
ボランティア経験	.453 *	0.100	0.806
新聞と読書習慣	.166	-0.187	0.520
家族や友人と自分からコミュニケーションをとる	.209	-0.143	0.561
R^2	.360		

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

2) シンキングと6つの独立変数の関連

シンキングとボランティアの経験とは統計学的に有意な正の関連が認められ (0.520), 身近な人の介護, 看病の経験, 部活・サークル・クラブチームへの所属期間, アルバイト期間, 新聞と読書の頻度, 家族や友人と自分からコミュニケーションをとる頻度は統計学的に有意な関連は認められなかった (0.065, -0.145, -0.008, 0.031, -0.091). なお, 本分析モデルにおける授業外学習時間に対する説明率は, 28.5%であった (表 3).

表 3. シンキングと日常生活体験の関連

変数名	標準化係数	95%下限	95%上限
身近な人の介護, 看病	.065	-0.294	0.423
部活, サークル, クラブチームに所属	-.145	-0.549	0.258
アルバイト経験	-.008	-0.376	0.360
ボランティア経験	.520 **	0.146	0.893
新聞と読書習慣	.031	-0.343	0.404
家族や友人と自分からコミュニケーションをとる	-.091	-0.464	0.281
R^2	.285		

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

3) チームワークと6つの独立変数の関連

チームワークとボランティアの経験とは統計学的に有意な正の関連が認められ (0.617), 身近な人の介護, 看病の経験, 部活・サークル・クラブチームへの所属期間, アルバイト期間, 新聞と読書の頻度, 家族や友人と自分からコミュニケーションをとる頻度は統計学的に有意な関連は認められなかった (-0.144, -0.027, -0.122, -0.051, -0.136). なお, 本分析モデルにおける授業外学習時間に対する説明率は, 40.4%であった (表 4).

表 4. チームワークと日常生活体験の関連

変数名	標準化係数	95%下限	95%上限
身近な人の介護, 看病	-.144	-0.471	0.183
部活, サークル, クラブチームに所属	-.027	-0.395	0.341
アルバイト経験	-.122	-0.458	0.214
ボランティア経験	.617 **	0.276	0.958
新聞と読書習慣	-.051	-0.392	0.290
家族や友人と自分からコミュニケーションをとる	.136	-0.203	0.476
R^2	.404		

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

考察

本研究は、社会人基礎力と日常生活における体験との関係を知ることにより、学生の生活指導への示唆を得ることを目的として、看護学生の社会人基礎力に影響を及ぼす日常生活体験の要因と関連性を明らかとした。その結果、アクション、シンキング、チームワークの全てにおいてボランティア経験が影響していることと、前に踏み出す力として、身近な人の介護、看病の経験も、社会人基礎力に影響していることが示唆された。この結果から、ボランティアや身近な人の介護、看病の経験は、学生にとって異なる背景や環境、価値観を持つ人々と交流する機会となり、社会人基礎力に有意な影響が示されたものと考えられる。

ボランティア活動と社会人基礎力の向上に関連した先行研究では、作田は⁶⁾、ボランティア活動が対人関係能力や知的活動力の向上に寄与し、特に学習意欲や社会への関心など、知的活動に関わる能力の向上に寄与していると述べている。また、曾は⁷⁾、地域連携活動の学習効果に関する研究の中で、「課題対応力」や「自己効力感」、「社会・自己認識」がプラスの影響があることを述べている。社会人基礎力における「課題対応力」とは、考え抜く力「アクション」の課題発見力や創造力であり、「社会・自己認識」とは社会人基礎力の中のチームで働く力「チームワーク力」の状況把握力を指している。本研究においても、ボランティア活動を行うことで、普段出会うことの少ない多様な人々とかかわり、人間関係を構築させながら、目的達成に向けて企画、実行、評価のプロセスをとる必要が示唆された。これらの一連のプロセスが、アクションやシンキング、チームワークにプラスの影響を及ぼすのではないかと考える。

1999年（平成11年）、文部科学省の中央審議会においてキャリア教育が定義され、国内の教育機関におけるキャリア教育の導入が進んだ⁸⁾。また、若者におけるボランティア経験の効果に関しては、「自己報酬感」、「愛他的精神の高揚」、「人間関係の広がり」の3つの援助成果を得ていることが示唆されている⁸⁾。社会人基礎力教育の必要性が問われるようになった背景には、学生が社会に出るまでに身につける能力と実際に社会の中で求められる能力に差異が生じていることが1つの理由として挙がる。そして、社会人基礎力に示されている3つの能力を獲得するには、主体性をもち、目的に向かって周囲の人に働きかける力や相手の立場を尊重して理解する力を養うことが不可欠であり、ボランティア活動を通して、社会人基礎力の土台となる能力が養われたものであると推察される。しかし、本調査で得られた結果は、社会人基礎力に影響している経験の一部が明らかになった。

A校ではボランティア活動を通して、企画、実行、評価のプロセスを実行することで、問題解決能力やコンピテンシーを高めることを期待している。しかし、主体的にボランティア活動に参加する学生はボランティア委員など、限られた学生となっているのが現状である。今後、学生の社会人基礎力に資する教育活動を継続的に実施するためには、ボランティア活動に対して興味関心が抱けるような支援が必要である。

中央教育審議会の「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の答申によると、奉仕活動・体験活動を推進する意義を、①社会人に移行する時期に、地域や社会の構成員としての自覚や良き市民としての自覚を、実社会における経験を通して確認することができる、②青年期の比較的自由にまとまった時間を活用して、例えば、長期間の奉仕活動等に取り組んだり、職業経験を積んで再度大学等に入り直したりなど、実体験によって現実社会の課題に触れ、視野を広げ、今後の自分の生き方を切り開く力を身に付けることができると述

べている。特に、何を指して学ぶかが明確になってこそ学ぶ意欲が高まり、就職を含め将来の人生設計に役立てることができる⁹⁾と、18歳以降の青年においては付け加えている。このような背景から、ボランティア活動を通して、自分の活動が社会に役立つという認識が、学生の自立心や自尊感情を高め、自己実現や将来目標設定につながるのではないかと考える。

看護専門学校の教育課程は、教科課程と教科外活動の2部門からなっており、この2つを組み合わせることは教育の大きな要素である¹⁰⁾。教科外活動は学校行事・課外活動・ガイダンスなどである。教科外活動によって培われる能力は、看護実践に不可欠な思いやり（他者性）・協調性・主体性であり、社会人基礎力がプラスに影響すると考える。今後も教科外活動を積極的に取り入れ、ボランティア経験の少ない学生にも体験できる機会を設けていきたい。そして、社会人基礎力は自ら高めようとする意識がなければ低下していく。そのため、今日課外活動の中で、社会人基礎力を定期的に振り返る機会を与え、学生自身が社会人となる自覚を持ち、社会人基礎力の必要性に気づき、自ら社会人基礎力の向上に向けて行動ができるような支援をしていく必要がある。

本研究の限界と課題

本研究は、A校1学年33名のみから得られた実態内容であるため、対象者数が少なく、一般化するには限界がある。しかし、本研究により1年生の社会人基礎力に影響した要因の一つであるボランティア体験を計画的に実践できるよう、教科外活動に組み込んだ体制づくりをしていきたい。

結論

社会人基礎力と、日常生活における体験との関連性を知ることにより、看護基礎教育のあり方への示唆が得られることをねらいとして、看護学生の社会人基礎力に影響を及ぼす日常生活体験の要因と関連性を明らかとすることを目的として調査を実施した。その結果、ボランティア経験と介護、看病の経験は、社会人基礎力のアクションに影響し、ボランティア経験は、シンキング、チームワークにプラスの影響があることが示唆された。看護学生の社会人基礎力向上においては、多様な人々とのかかわりを増やすことが出来るように、全員が、教科外活動を積極的に取り入れていけるように体制を整えていくことが課題である。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました看護学生の皆様に深謝いたします。

文献

- 1) 経済産業省：社会人基礎力，（オンライン），<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>（参照 2023-3-31）
- 2) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告シリーズ，（オンライン），https://www.nurse.or.jp/home/assets/20230301_nl04.pdf（参照 2023-3-31）
- 3) 看護学教育質向上委員会：2021 年 3 月卒業生に対する就職後 1 年以内の退職者に関する調査報告，（オンライン），<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2022/04/2021taishokusha.pdf>（参照 2023-12-10）
- 4) 日本私立大学連盟：私立大学学生生活白書，（オンライン），<https://www.shidairen.or.jp/topics/2022.20221011gakuseihakusho.pdf> (shidairen.or.jp)（参照 2023-3-31）
- 5) 箕浦とき子，高橋恵：看護職としての社会人基礎力の育て方（東京都：日本看護協会出版会，2016）
- 6) 作田良三：「社会人としての資質能力の」向上に対するボランティアの活動の効果．日本教師教育学会年報 16:119-129，2007
- 7) 曾愉茜：「大学生による地域連携活動の学習効果に関する研究」．同志社政策科学研究 23：46-62，2022
- 8) 妹尾香織：若者におけるボランティア活動とその経験効果．花園大学社会福祉学部研究紀要 16:35-42，2008
- 9) 文部科学省中央教育審議会：青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申），（オンライン），https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1287510.htm002（参照 2023-11-1）
- 10) 網野寛子，遠藤由美子，齊藤茂子，林慶子，松原定雄：看護教員のための学校経営と管理（東京都：医学書院，2013）